

2012.8.18~19

## 五ヶ庄西川原地区サテライトセンター

被害が大きかった五ヶ庄西川原地区には、すぐそばの河川敷にサテライトセンターを週末の2日間にわたって設置しました。

この週末のスタッフは1日100名を超えました。



## 黄檗グリーンタウン自治会

せりろ  
芹生 徹さん

未明からの、かつて経験したことのない激しい豪雨、近所の方からの電話で起きると家の前の道路はすでにおびただしい泥水の川状態、当時自治会長職にあったこともあり、腰近く迄の水の中を歩き廻ったことが、今も思い出されます。当初は市からの情報も入らずとほうに暮れていましたところ、宇治市社会福祉協議会から被害住居の泥出し、清掃等のボランティア派遣の申し出を戴き大いに力づけられました。又市の災害対策本部の方々との連携のもと、自治会員の方達のご意見、要望を市に反映して参りました。平穏な日常生活を送っていると、つい忘れがちな災害ですが、昨今はいつ、どこで起きても不思議はない気象状況であり、今さらながら非常時への備えや日頃の地域の方々との連携、宇治市社会福祉協議会や市の関連部署との良好なコミュニケーションが不可欠と感じさせられた豪雨災害でした。当時ご尽力戴いた宇治市社会福祉協議会や市の職員様にあらためて御礼申しあげる次第です。地域が平穏無事に日々過ごせるようお願いして止みません。





## 資機材班を通じて 感じたこと

宇治市災害  
ボランティアセンター

運営委員 瀬古 雪夫



本部で資機材貸出し班を担当する事になりましたが、最初の頃、資機材の種類、個数が少なく、活動いただくボランティアの人には十分な対応ができませんでした。日増しに支援の輪が広がり資機材の不足分は徐々に解消されてきました。

人出不足が時間帯によっては起こり、班を超えての応援体制が執れた事で解消できました。

なお、今回の豪雨災害の泥出し作業では一輪車、高圧洗浄機、小型の道具、特に十能じゅうのうの要望が多かったです。



2012.8.25～

炭山地区災害ボランティアセンター

炭山地域は、発災後数日間道路寸断により孤立してしまいました。そんな中でも、子どもも大人も地域のために活動をされていました。道路がなんとか通れるようになり、住民の皆さんとNPO団体、宇治市社会福祉協議会との協働によるセンター運営が展開されました。

## 炭山町内会

富部 もゆる 炎さん

記録的な豪雨で山腹崩壊、河川氾濫で大きな被害を受けた炭山地区。その上道路が寸断され、電気、水道、電話などのライフラインも破壊され情報がなく、数日間孤立集落に。その日の内に区の役員を中心に「災害対策本部」を立ち上げ、災害復旧を目指しました。被害状況の把握、被害家屋への援助、ボランティアの采配、行政への要望など連日対策本部で話し合いました。災害直後から、住民の知り合いの方、インターネットで被害を知ったというボランティア団体が災害復旧のために駆けつけてくれました。ボランティア団体のネットワークの凄さに感心しました。宇治市社会福祉協議会を通しての災害復旧ボランティア活動は十日余り経ってから本格的に始まりました。炭山地区災害ボランティアセンターを開設し、物資の調達、住民のニーズの把握など全面的に支援していただきました。行政や宇治市社会福祉協議会任せではなく、地元の対策本部と行政、宇治市社会福祉協議会が連携して災害復旧に貢献できたことは今後の教訓になりました。





## 宇治市災害 ボランティアセンターの 運営にかかわって

赤十字レスキューチェーン京都  
宇治支会

藤本 規弥さん



京都府南部地域豪雨災害では、宇治市災害ボランティアセンターの運営スタッフとして参加し、また自分たちの団体特性を生かし、府下の五つの支会とも連携して運営資機材の提供などを行いました。

当会は、1996年5月の発足以来、宇治市社会福祉協議会や宇治市災害ボランティアセンターを通して、いろいろな地域や団体と関わりを持ってきました。今回の災害で活動する中で、センターのあちらこちに顔見知りの方がいることがとても心強く、改めてこうしたつながりの積み重ねの大切さを実感しました。

我々だけでは、活動は成り立ちません。いろいろな人の力を借り集約して活動できればより大きな力になると考えます。お力添えいただける方々を求めています。



## 2012.9.3～9.8 ボランティアの力から地域のカへ

全国からのボランティアの力をお借りして、少しずつ元の生活の一步を歩き始めた宇治。全国からの温かい励ましから、身近な地域での助け合い活動へ展開を移すことを決め、宇治市災害ボランティアセンターは「平常時」へ移っていきました。

### 京都府南部地域豪雨災害 数字でふりかえる宇治市災害ボランティアセンター運営

ボランティア活動者数		3, 265名
宇治市災害ボランティアセンター運営ボランティア等スタッフ		1, 145名
スタッフ内訳	加入団体	166団体 328名
	宇治市	24名
	京都府市町村社協連合会派遣協定に基づく市町村社協職員、京都府社協職員	187名
	京都府災害ボランティアセンター構成団体	8団体 18名
	災害ボランティア活動支援プロジェクト会議	24名
そのほか（個人等を含む）		86名

このほか、京都府からも職員が運営スタッフとして参加して下さっていました。（数字はすべてのべ団体数、のべ人数）

## 2012.9.3

宇治市社会福祉協議会では、伊勢田地区で行われていた災害時の支援について教えていただく機会をもちました。

### 学区福祉委員会が地域と連携して支援したこと

伊勢田学区福祉委員会 古世 哲也さん

- 1 民生委員と共に、住民（特に独居高齢者）の安否確認
- 2 民生委員・町内役員と共に、被害状況の確認
- 3 町内役員・住民と共に、畳上げ等清掃作業
- 4 民生委員と協力して、被害住民の仮住居の交渉

以上のような作業を通じて以下のように考察します。

今回の水害による床下・床上浸水は、主に伊勢田小学校以西周辺に集中しました。これは、地理的にすり鉢状の地形になっているため、東側地域からの雨水が一挙に流れ込んでくるため、この状況は毎回のようには繰り返されています。増水速度は、想像以上に速く、高齢者世帯の多いこの地域では、冠水した道路を西宇治中学校方面に避難することは困難と思われます。従って、水害の危険度が高い場合、住民の安全と速やかな避難を図るため、避難路の見直しと再設定などの意見を聴取しています。携帯電話での勧告も必要ではありますが、全ての住民が周知するとは限りません。万一、宇治川決壊のような事があれば、当該地域は完全に水没するであろう予測を踏まえて、新たな避難所の設定も考慮に入れる必要があるのではないかと考えています。



## 「宇治市災害ボランティアセンター、宇治市社会福祉協議会をサポートして」

京都府社会福祉協議会  
 地域福祉・ボランティア振興課  
 京都府災害ボランティアセンター  
 事務局

さいき  
 西木 奈央さん



毎晩のように反省と改善を繰り返しながら、一人ひとりの手によって宇治市災害ボランティアセンターが作り上げられていく姿を近くで見ていて、私達がすべきことはこの方たちの頑張りを支える事なのだと鮮烈に感じました。

入職1年目の夏。奇しくも宇治市社会福祉協議会への初めての訪問が災害支援になってしまったため、後日片付けも終わりスッキリした“普段の”宇治市社会福祉協議会の姿を見てひどくほっとした事を今も覚えています。皆さん本当にお疲れ様でした。



## これからも“宇治らしいつながり”を求めて

### 京都府南部地域豪雨災害を経験して 私たちは、改めて考えました。

「東北までは遠くて行けない。

でも宇治のまちのことなら手伝える。」

「何でもやるよ。」

そんな言葉をかけてくださる地域の皆さん・・・

今までのつながりがあったから、この25日間が  
ありました。

これからもつながっていききたい。

もっとつながりを広げていききたい。



2013年1月の新春福祉のつどい  
では、「“宇治らしい”地域のつながり再構築」というテーマでパネルディスカッションを開催しました。ボランティア活動に参加した大学生、そのボランティアの支援を受けた地域の代表者、ボランティアと地域を支援した宇治市社会福祉協議会がパネリストとして参加しました。

コーディネーターの京都府社会福祉協議会より、「宇治らしいつながりとはまさに“コラボネット”」との言葉をいただきました。



2013年の共同募金運動のチラシには、宇治市災害ボランティアセンターの活動を取り上げていただきました。宇治市民の皆さんに、災害時の活動を支えるための資金の一つとしての共同募金があること、実際に京都府南部地域豪雨災害で役立てられたことを伝えました。



2013.2.24

## 京都府南部地域豪雨災害活動 ふりかえり会

宇治市災害ボランティアセンターでは、加入団体の皆さんと、「あの時、一体地域はどうなっていたのか」を話し合いました。



### 1 グループ

- 地域SNSなどの情報発信ツールを活かした、収集、発信のあり方の検討が必要。
- 運営スタッフのケアも必要ではないか。

### 2 グループ

- 食物アレルギーの子どもがいる。その子どもたちの対応を知ってほしい。
- 団体の「タテ」のつながりはあるが、「ヨコ」のつながりが日常から必要。

### 3 グループ

- 宇治市災害ボランティアセンターが手伝ってほしい内容（運営を含む）を発信する手段として、被害の少なかった地域に広報車をまわしてはどうか。

### 4 グループ

- ボランティアがしていることをもっと広報すべきである。

### 5 グループ

- 自治会や町内会でご依頼内容をまとめていただけたらいいが、1年交代で役員が替わっている。
- ボランティアスタッフとして参加できたのは、家族の応援があったからこそ。

### 6 グループ

- 「近助<sup>きんじょ</sup>」が大切。
- 記録と伝承が大切。

### 7 グループ

- 「お手伝いを頼んだらどうか」と声をかけたが、遠慮もあって断られたところもある。やはり日ごろからコミュニケーションが大事。
- 手話のできる人がほしい。聞こえる人とも連携をして学ぶ場をつくりたい。

### 8 グループ

- キーワードは「地域」と「訓練」。障がいのある人も訓練に参加しているが、いつも「お客さん」対応になっており、訓練の場面を通じて手引き介助などを学ぶ場に。

### 9 グループ

- 何を手伝っていいのかわからなかった。加入団体の役割とは何か、考えたい。
- 顔が見える関係は大事だが、閉鎖的になっていないか。

### 10 グループ

- 若い人たちがボランティア活動に参加をしてくださっていて感動した。
- 温度差、地域差もあるからこそ、もっと市民に発信をすべき。



## “今”宇治市災害ボランティアセンターが 住民・地域とともに歩むために

このふりかえり会をきっかけに、宇治市災害ボランティアセンター運営委員も、地域で加入団体がどんな思いで京都府南部地域豪雨災害と向きあっていたのかを知ることができました。宇治市災害ボランティアセンター第6回総会では、加入団体が災害を経験しての“思い”を語るリレー報告会を開催しました。

### “常設型”災害ボランティアセンターの 意味を問うリレー報告会

2013年4月に開催した第6回定期総会後のリレー報告会では、京都府南部地域豪雨災害の経験を活かし、加入団体の皆さんが“いつも”の活動で、地域とのつながりを改めて紡ぎ直す取り組みを進められていることを中心について報告いただきました。

わたしたち災害ボランティアセンターが「いつも」（常設）からあるのは、地域の皆さんと一緒に災害や地域について考える機会になるからです。いつもあることが「目的」ではなく、「手段」にして取り組んでいくことが大切であると再確認できました。

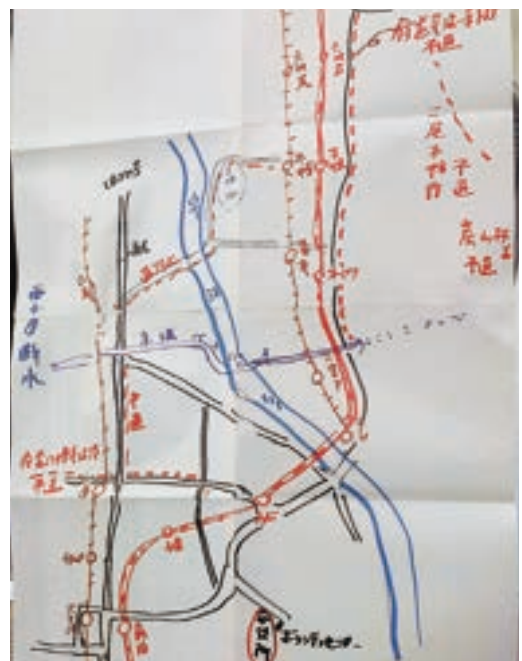
京都府南部地域豪雨災害の経験を踏まえて、2013年の宇治市災害ボランティアセンターは様々な取り組みを進めてきました。

### 宇治市災害ボランティアセンター 移行判断・運用訓練

2013年11月24日、宇治市主催の防災訓練にて、会場の笠取小学校にはパネル展示を行いました。また、福社会館で宇治市災害ボランティアセンター運営委員と宇治市社会福祉協議会職員とで、発災初期期の図上訓練を実施しました。一年前の豪雨災害時の活動を「追体験」し、災害時におけるセンター運営面での考え方の共有を図りました。

12月7日は、宇治市災害ボランティアセンター主催で、加入団体とともに運用訓練を福社会館前で実施しました。加入団体のうち35団体が参加し、ボランティア受付から送り出し、活動報告までの一連の流れを追体験して、体制、運営の見直しにつなげられる新たな気づきを確認しました。

「あの水害を体験したのだから、うまくいって当たり前」との声もありましたが、状況や体制など、全く同じ状況での災害など二度とありません。むしろ、訓練を重ねて、センターとしての加入団体との顔つなぎやアイデアの「引き出し」を増やすことにつなげていけることが大切だと思います。



## 私たちの“これから”を考える パネル、リーフレット、回覧板の作成

京都府南部地域豪雨災害の経験を踏まえ、宇治市災害ボランティアセンターは積極的に被害者のニーズ（困っていることや支援してほしいこと）を集約すること、ボランティアの受け入れ体制の整備が必要であると意見が出ました。また、センターの運営には情報の共有も大切です。情報の共有には、加入団体の中や、各地域の中での情報交換が大切であると感じました。また、宇治市災害ボランティアセンターの存在を知っていただくことが大切であると考えました。

そこで、宇治市災害ボランティアセンターでは、次世代に災害の記録を伝えるという意味でのパネルの作成、自治会町内会等に宇治市災害ボランティアセンターの存在を知っていただくためのリーフレットや回覧板の作成を企画しています。

“自助、共助 近助、公助” 常に顔の見える関係の大切さを伝えていくために、活動を続けます。



### 京都府南部地域 豪雨災害

写真提供：南南タイムズ社

**平成24年8月13日・14日**

【災害の概要】  
宇治市では8月13日午前7時頃から雨が降り始め、ピークの14日午前3時頃から3時間の雨量は過去最大の186ミリ(累計雨量311ミリ)に達した。宇治川支流の勢次郎川や戦川、志津川など中小河川で決壊や氾濫が相次ぎ、そこから市街地へ浸水が広がった。

- 人的被害 死亡2名
- 住宅被害 全壊30棟、大規模半壊7棟、半壊162棟、床上浸水779棟、床下浸水1,296棟
- 河川決壊 勢次郎川、志津川 他
- 浸水地域 20箇所以上
- 道路崩土 二尾木橋梁、大津南郷宇治線 他





## 元気になった、そして元気になれる地域の「これから」へ

京都府南部地域豪雨災害では、大きな被害をもたらしました。

でも、災害をきっかけに地域のつながり、自分たちの団体の活動の目的を見直したみなさんもおられます。災害というできごとを受け止めて、活動を進められている一部の方々をご紹介します。

### 宇治市介護者（家族）の会

最初にセンターに来て、スタッフに声をかけて下さった言葉、「来たで！何でも言うてや。」の一言に多くのスタッフが勇気づけられました。

その後、宇治市介護者（家族）の会では、「災害時わたしたちの会では、何ができるのだろうか」と考えたそうです。

宇治市介護者（家族）の会は発会27年を迎えます。2012年8月の豪雨災害の時に当会は「水分補給班」ボランティアに参加しました。初めての経験、会員各位の安否が気になりマップの必要を痛感し世話人会でマップ作成の方針を決議しました。2013年度新規に世話人に選出した方を中心にインターネットの地図検索を活用し2013年5月に完成しました。新規会員も随時補充し、世話人全員が会員各位の所在を把握しお互いに支え合っています。



中野 正子さん

### のびのびの木

アレルギーのある子どもたち。最近は給食などでも配慮が広がっています。でも、災害が起こったら、わたしたちの子どもたちは避難所で大丈夫なのでしょう。

京都府南部地域豪雨災害をきっかけに、アレルギーのある子どもたちを持つ親の会ののびのびの木では、宇治市災害ボランティアセンターと関わりを持つようになりました。

豪雨被害で日頃の備えの必要性を痛感しました。アレルギーをもつ家族が被災した時どんな事が起こるか過去の事例から学び、当事者は自らが何をしておくべきなのかを知る事、アレルギーのある人のための対策が必要な事を当事者と地域の人で日頃から学びあっておく事が減災につながると考え、アレルギーの事を考える防災講演会とキャンプを開催し、災害時の具体的な対策を多方面から学習しました。今後もこの学びを深めていきたいです。



徳田 葉子さん

### 東宇治南地域包括支援センター

東宇治南地域包括支援センターは、被害の大きかった菟道、志津川、五ヶ庄を担当地域に持つ地域包括支援センターです。高齢者の相談窓口として、地域に根ざした活動を展開されています。

2012年の秋には、災害をキーワードに、小地域包括ケア会議を開催されました。

この災害を通し、地域の力を強く感じた反面、課題があることも痛感しました。そこで『災害から学んだ、私たちが出来ること』を小地域包括ケア会議で地域の方々と共に考える機会を持ちました。出席者には被害にあわれた方もおられ、様々な意見を交わし、災害時の助け合いは普段のつながりが大切であるとの意見が多かったです。小さい単位での横のつながりを大切に重ね、互いに連携をもち続けることが必要であると感じています。



はとへ 波戸邊 晃子さん

## 一緒に元気な活動を続けていくために

### ～宇治市社会福祉協議会（コラボネット宇治）がめざす、“コラボ”のカタチ

宇治市社会福祉協議会（コラボネット宇治）は、宇治市災害ボランティアセンターの事務局です。京都府南部地域豪雨災害における宇治市災害ボランティアセンターは、宇治市の地域福祉関係や市民活動団体が中心になって運営をされてきました。

地域の皆さんと一緒に向き合った25日間。

わたしたちにとって、大きな、そして忘れられない25日間でした。

地域団体の皆さんが、京都府南部地域豪雨災害の中で取り組まれたこと、

地域団体の皆さんが、京都府南部地域豪雨災害を経験して取り組まれていること、

それらをもっと知り、多くの人に知ってもらうために発信したいと思っています。

そして、「コラボネット宇治」として機能できることは何かを、今後も地域の皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

## 支援する側、される側を通して

京都府南部地域豪雨災害のあと、日本各地では大きな災害が続きました。

災害を経験したからこそ以前にも増して、テレビや報道を見るたびに「障がいのある人や高齢者はどうされているのだろう」と思います。

2013年7月の山口県や島根県を襲った豪雨災害では、京都府災害ボランティアセンターの呼びかけで、山口県萩市災害ボランティアセンターに資機材の提供を行いました。

また、2013年9月の台風18号水害では、京都府に初めての「特別警報」が出され、京都市をはじめ京都府北部に大きな被害をもたらしました。宇治市社会福祉協議会では、京都府社会福祉協議会の調整で支援を行いました。宇治市災害ボランティアセンターでは資機材の提供、貸出しのほか、京都府災害ボランティアセンターの「ボランティアバス」の運行に際して、バスリーダーを務めるなどの支援を行いました。

## 編集にかかわったスタッフより

### 宇治市災害 ボランティアセンター

副代表 山本 博之 ひろし



災害ボランティアに関わるようになって年月が経ちますが、この、初めての地元災害に対して、いろんな立場から向き合うことになり、多くのことを考えさせられました。

多くの被害をもたらした災害ですが、その中で、人、団体、地域が大きな力、可能性を秘めていることに、私だけでなく多くの方々が改めて気づき、心強く感じられたのではないのでしょうか。

亡くなられたお二人の方のご冥福をお祈りいたします。

### 宇治市災害 ボランティアセンター

副代表 海老名 典子



災害は、いつどのような状況になるのか判りません。どのような災害にも対応して行く常設型の災害ボランティアセンターになる様に地域の皆様と共に向上して行きたいと思っています。何度も起きては困りますが、「もしもの災害」に少しでも役立つ事を考えて冊子ができました。防災、減災に役立ち“ボランティアをする側”と“される側”が、よりスムーズに絆（つな）がることを望みます。編集にあたり皆様の御協力ありがとうございました。





発 行 宇治市災害ボランティアセンター  
宇治市社会福祉協議会（コラボネット宇治）  
発行協力 京都文教ボランティアセンター  
発 行 日 2014年3月

この冊子は、赤い羽根共同募金の配分金で作成しました。